

『仏山堂詩鈔』の刊行に奔走した

せんじょう しせん
安広仙杖（紫川）

仙杖（名は訥、通称は一郎、号は紫川）

は、文政十二年（一八二九）豊前国
 仲津郡大野井村（現在の行橋市大野
 井）の安広家の出身で、村上仏山の妻
 お久の十歳下の弟。小倉足原の広寿山
 で僧万丈の法弟という僧籍にあったが、
 度々姉お久の嫁ぎ先である水哉園を訪
 ねては泊って行き、塾生たちにも人気
 があった。

一方、仏山が『仏山堂詩鈔』の編纂
 を思い立ったのは弘化三年（一八四六）、
 完成したのは六年後の嘉永五年秋のこ
 とだった。年老いた母を喜ばせるため
 にも何とか刊行を実現したかった仏山。
 しかし、いくら素晴らしい詩集とはい
 え片田舎ではどうすることもできない。
 京都や大坂あたりの名の知れた詩人の
 紹介や推薦が欠かせなかった。

そんな折、広島さかいの坂井虎山こざんの塾に入
 門したと思われていた仙杖から思い掛
 けない便り、京都の池内陶所いけうちどうしよの塾に入
 門しているという。仏山にとってはこの
 上ない吉報。即刻京都の仙杖に宛てて
 手紙を書き、約二十年前貫名海屋ぬきなかいおくの
 塾で共に学んだ池内陶所への依頼文を

同封した。池内からは全面的に協力
 したい旨の返書があり、池内を通して
 京大坂の一流詩人達の序文や批評文を
 得ることができた。この間、事の仔細は
 その都度仙杖から仏山に便りされ、仏
 山からは細々とした指示が仙杖に届け
 られた。

『仏山堂詩鈔』は安広仙杖なしでは
 世に出なかったかもしれない。

嘉永五年（一八五二）十一月『仏
 山堂詩鈔』が世に出てから漢詩人村
 上仏山の名は広く天下の知るところと
 なり、以後は水哉園を訪ねる知名士
 が急増、池内も水哉園を訪れ仏山と
 涙と喜びの再会を果たしている。

『仏山堂詩鈔』完成の翌々嘉永七
 年、仙杖は筑前国遠賀郡山鹿村の塾の
 師範として招かれている。更に元治元
 年（一八六四）小倉藩主小笠原侯に
 召されて仲津郡大橋村の御茶屋で子弟
 の教育に当たったとも云われる。その後、
 元永村でも教鞭をとった。

晩年は小倉に閑居し、明治三十四
 年（一九〇一）その地で没した。享
 年七十三。